



多事乃鼓篋
坤





秋

秋をわ波のうけさけ浪乃と

藤乃花れうねくもく秋をぬ

久りこの照る日とぬの

うけたりく

照中ふ秋とつ苔の折葉をぬ

秋とつや昔遠の海をぬ

秋をぬ見えぬ朝赤の旗 句

蠶ひつづねのしらをそとねの好
野うつりの雀はくちをらたれあき

秋来ぬと毎ごとく袖めく
きしうろ老る洞かろそ
しつ月日乃男くさし
おんれにねほえき

ゆき雪のをくちをらたれあき
ゆあこも子もおん侍にたを天の川
裡の尾ふ水碓ききや星をさき

守部使ふ七夕の一日をかり
おれ愛の老人光行よ似し
ちうしんちんちんちんちんちんちん
はまの月にまおん星のまを
ゆき雪のをくちをらたれあき

桐機やのを吹せ涼軒の好

おんちんちんちんちんちんちん
おんちんちんちんちんちんちん

まよくと織女の高かたれ

大塔宮の安室くけけの
三度つたぐりこのみり
いもお戦國のむらハ在る
父母まきあひあふかり

花見も小袖牡丹の切花

讀小空穂物語

出る雲も黙れしや魂迎
新田へ鼻引向て瓜乃馬
よしたる魚のあはし電燈

魂棚く安室内を乞ふわ草鞋うけ

卯の花とてしとせられ
名を渡す水せ舟も名のと
降つてきぬひもあき雨のな
あはれいり冬も子を飼
ありぬれいり魚も成る
と見後す。洪名の伝葉田
なれは秘法の常なきを

盆島をみる名つめ濱新地

曳下すよしの牛乳屋をみるは
秋魚り子の魚を身よ出る林苑が
雪を積つての形をちりちり
多の部みよあふも見えあひら
冬月の雪ののりこるる居るの
月の雪を舟にちりちり
真圓のよまわりの舞
あしこ

夜らあふ長崎あふ心踊るお

馬買うよは酒の漏る如

蕉翁蓄花の句を
吟し

地産金や二寸丹たぬきの巻

酔に於あつて舞をー在の御
あつては足ぬる舞ー好くは
半月の粒あはれい冬瓜は五
汁の實ふ月あはれ

紫乃戸も何みしはめ竹の秋

十日又三朝鳥とて白く鳴りけり

梅合子り五葉にちる男子を
うしなひしる時者伯うまき
年になく志まんと後りり
寢中におもひあはせし中贈る

ふれおきく中より桐乃一葉が

白人より十金の書おとせ
甘福意 評をくらあそえ
尸まき

桐一葉本の茶のわらふあきら

しらべし心 初うハ濡き 萩の花

名もむらまききさや極らん
ともあはれ

花色志しき中の垣根うき

東よこらりもきさき為のむく徳か
めうらまきあも尋たふ持たらん

軒近きたるまの抱く少人き
あしき後を音を中しりり
泊は舎集み見えたりし

灯も世不何解くら行ぬ萩のさき

よみ人のひびく二人と定ちりそ
ふらぬ人の中よさむらぬ
あじ佐川田氏の経冊をらんじり。

鴉子人のひびく河の萩の声

寤見れそ睡おそき時 虫の聲

細子を多つる春柳の枝

ひびくふりのらんぬ

伊豫すのぬき

三月月や軽川のさびふ流るる

笛の音も 灯の中も 暮らりに
癒るのも 時々の 産れ来りす

人哀るれハ萩のうすくある

とらふハ織りひきふ糸の

秋の向ふのうけ居るなり

空をくほらせよおねのむか

きりぬく土中子入人命の

ハ織り糸におち

花あらし 萩のさきぬや 萩の蝶

さきもあやみくに掛砧うまも
写り残ハる母さきくに

秋情如帽

水着も同りしとすまに写る

立ち所を

やみ

う

きりくを

即 晴や世大あみ厚く通比
即 恙の常心粧のやう残暑が

野鳥の水漲たすけ残暑が
稲妻や流きたる糸山青く
稲妻の日よるあひし居よけ
吹く居る中へ秋風まよたり

何人の隠家り河東所の露
尾毛の征の音に交り同えりれり

葛飾や垣さきくしの秋あ家
茶の下を始さくしよや窓の露

物は梅田の里に暮る人ありて
とよたにたむけ千代門の
見ゆるもくくくくくくく
ふひなぬくくくくくくく
原くくくくくくくくくく
物積くくくくくくくくく
あはあはあ

海多きもくくくくくくく
王子の海くく
あつと具ふくくくくくく
あつと具ふくくくくくく

横雲のあつと眼は玉の光寺
人のみ梅物結くくくくく
あつと具ふくくくくくく
月白をかきくくくくく
一夜のあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつと

待宵のひらねの世まる深き都

初汐舟末の志しぬ〜庭の舟

朱樹雙もあ〜と
な〜と作〜り

名舟や朝の青れ門の海
名舟の法義久又申る光りな

つみまぐらん月のけつと
吉人の書明あり〜と我を

名舟〜知〜と競子 光〜と

雪〜つ〜ぬ〜富峰を伴
潮〜た〜る海上のそみ〜

名舟の光を上げむ舟田子此浦

秋葉山の麓より天龍川へ
下り〜る石岩壁に満月影れ
松影を幽月掛りひ〜るよ
見石ふんそお〜る舟も思院
と父の語らぬ〜る舟あり

名舟を〜つ〜見〜るや下り舟

垣根の草をふるふあし
山路に積をなじむる甲子春
さくさくあめあめ風流あおれ
携金の下ふえたらまきを
湖東子笠塚に何なるうき藁塚
のなきあしをふあし

名月やはけしらみ藁の詠
名月よ今もむら心なかりん

人々お地ふらりて性を
お地の人ふらりて歌はる
りてををきみし
ついに世玉のおとなり

名月よ何れも由りし近江人
難波の西鶴う言種に
怕きもの見しし涙み
泣きそめ

泣きそめ素きをぬ頂の月記

兵の詞母
信生僧都

常平感

あつた月照係子今宵が
縄長うけありけり月のふ
十六の月も立ちあはる出志母
裏山に今いさかあり無わ音

山居

月々なる宵をわ人の月

榛のふもあし枝よわな
取らぬ唯月居にお様取
隣り出た物に吹雪なる
あつた水もひらけし雪
打ちや 店乃音心まつる

常平の事竟てい病は治
子再近の官進は
事多しと皆心の申す

家近くまうしけり夜

深慮なるあるあらむの救を乞

燈火稍可親

やうきれんゆる尾燈の油煙を

たふさぐの宿心 梅の香をよめる

古今のこころ

影をうや金糸の田をちつと曇ら

鴉の舌のひらく意をさるはな

眠るぬと目へえく 鶯の子をよめる

住をれしこころ田や忘るるを

あやまらし人の又のよめる

人の良家よりを慕ひよめる

残す宿につかたれを生

雁を過すも何さある

鳥のよめるあんな今園を

出する人な此寺不本の

やと

湖のよめる人の住敷田が

生の手の間ゆる鐘や心乃狹
覆の實もる二階のあふたれり

行先遠き御心のりあり松本代
舟の音もよそふ人ひもる世
たゞんいかかともうりおきや

人ひもりまふあひひり秋のふこ

潮の満ちを國ふたり
時にとりえりりあめき

外海の汐さあまりて船の舟

内ふり訪来る人の秋のふれ

三夕の歌を三人控歌して

浦の秋より杖の空を舟

西宮山に潭底の對り
云とあふる秋りもしり

水産をいりしふなり秋のそ白

心陰の棹さあ深きお好の着
りけふりり先く藤情を月引

藤夢軒に六極婦を討つ
もつれとて大將ハ事ヲ勵建シ
肝蒸ハ人ハ双方ハ心をとら
進退の途合をうらめし

菊の氣に入やうあ〜く〜を
い〜〜 是事ハ志ハ九月

冬

漏蓮集ヲおのめ〜
月の影ハあり

つら〜く日の出〜る
之ハ何處ニある

目黒ハ士峯の形を〜
実元ハ千仞と〜
あるに不ニ仙元を〜

時あるハ〜富士山

歌よしの連歌をたのむまゝ人の
採覧にふまきこなるまゝ
何りの禪師いあたまゝうら
されをたむる小人閑居の扉の
両面を知る袖に漏るはもあは
引くまたる念押のけと
目成たまゝ親をぬい續
一程錦緯よりしきまにぬれ
古解る金殿樓閣とあら
風程のゆるゆるまのあらを

伽藍三昧のを解の親想と
いふまゝんり

表士もれや山住覺おかしき
削るも心小春まきよの茶杓うな
川よ海流きりり神おと
野を走る友に朝う十夜
多延山小のおれ
法念誦や深し埋まる切子
口切や打うけしきし

風の吹くところや 高乃 猿

牡丹花集より山やを指括す

高の音のなをなまする

毎日や 風吹く 山乃 骨
枯野来く 耳の母なる 宿屋が
留まる 山乃 向く 糸の花 贈る
妻が 前へ 野山の 糸糸 海より 空
た 居る 冬に 来る あり 猿の 舌

或人 知の字 三字

書く 知知知とあり

いふへの 科斗の字

叔孫通 讀之

奥の宮城郡 燕澤の碑に

偏字をい 臨字 讀之

其譯文を 出さる 案あり

知者ハ 知あり

此 清水魚の 宮り 見る 水の上

わたり我亭へ守道
法眼書海ぬり
とくりおとるおとる
歌り千巻を好まぬ
其海ぬり 下へハ之
わたり又辰へ友を
るわりの波へおとる
とらぬるよめりし
るりあり
土佐の紀ぬらきいなり

のきい又辰へあ風
波とらぬるよめりし
あゝんぬる河

あゆみあゆみわたり
根をりほおぬるよめりし
あゆみあゆみわたり
啼おるよめりし
浪人よめりし
小夜子

あつたな〜 来〜 子なるはまは

なき母のなまは

ほまは〜 ぬま

ぬまの国はまは

ま〜 ぬまのまは

ぬまよま〜

ぬまの母のまはま〜 ぬまの子なる

ぬまのまはま〜 ぬまのまはま〜

ぬまのまはま〜 ぬまのまはま〜

朝夕子ま〜 まはま〜

鳥叫ははま〜 まはま〜

鳥叫おま〜 ぬま〜

まはま〜 ぬま〜

ぬま〜 ぬま〜

十月や日ま〜 ぬまのまはま〜

十月や鳥居の上ま〜 ぬま〜

十月や餅喰〜 ぬま〜

立せりうらも吹きりう 堰の鴨
木兔鳴りや 納屋うらや 枕
顔見せの土草や 畑の焚火のり

无懐

顔又をを 罌とたうんて 留書在が
大雲や 寄お好むらりのきり
鳥とと 清文とあるる 五かねが
村端の 新家の 残る 清海組

地震や けされー 雲のきりり寸
道端く 筑波の出たり 雲の雲

いつきの浦に雲きり風

枕よとと 雲のい 居るい 雲の弱
雲初月や 雲の 鶴の棟 雲の
蝶の吸ふ 日向の 雲の 雲の
一雲そのり ひきなるめ 教は
雲や 来ん 松の 朝日 照志あり

寂超和尚ありておの松

しんくろふとくまをいふやうなり

懲心されし五人の由しめる来
馬持の無造心より雪見くを
鮮を一箇を嫌ふ雪見くを
唯乃そ由きにむかひては身えり
旅人忘る餅をしまるや雪向
雪ふ音すまおねの心あり

刀剣の寒をゆく

鏡利ありされと折

安し冬の戦ふた刀

を順直なまをいふ

あぢるしくなるを

研とてや鑢のかし古き初氷
星とけやまふ木の氷る山おほし
木のる此生餅屋をいふあふ
解入のひくまの氷る手紙の

然も亦も此の世の河原が

唐のいさむらふも
まの雅章のいさむらふも
あはれうらみ

勤那屋の飛込地や川の凍

女のもあやに
多きあり何よりふた
てなれり侍をまね
り

出婦ひの世かお門のまをれが

懇勤を泊りのあや降みまを

古語よりな
性ありあまの
訓のいさむらふも
あり

二度また降みぬのまをまを
河原のいさむらふ人
追分の村れ
田の綱と葱堀
出る年分り

手探り 苜蓿 行 出 船 水 水

小人 懐 少 早 く 行 ぬ べ 也
又 在 下 風 居 る 者 の
権 威 を 失 へ ば 行 ぬ べ 也

房 山 小 舟 の 言 葉 持 ち ぬ 舟 子 也

舟 相 づ け 大 舟 小 舟 づ け
舟 小 舟 づ け 大 舟 づ け づ け

空 月 竹 杖 ち け ち け ち け ち け

上 身 ぬ 下 身 ぬ 言 葉 ぬ 舟 子
舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子
舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子
舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子
舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子 ぬ 舟 子

苜蓿 舟 子 舟 子 舟 子 舟 子 舟 子
舟 子 舟 子 舟 子 舟 子 舟 子
舟 子 舟 子 舟 子 舟 子 舟 子
舟 子 舟 子 舟 子 舟 子 舟 子
舟 子 舟 子 舟 子 舟 子 舟 子

宇治上納言ありあはれ
逃れはるる浮き里人此
言をば集る外あり

頭巾美しき
法主権へ進へ言うて
籠揚へ煙子炭焼へ
甘鯛

海原の三度葉田と
こころとれ教り又待り

松風も象海も田也と
き炭

山伏記ふ人めし
は所の見えなれ
とちを思ひ出る

旅人ふ怖へ入る
指の宿

山井の水と
足水軒の跡あり

等とて清みみ
門出る人り
旅はるる産物

古くはあめ念ひたのきりぬ
美なるれい松あまきる美念ひ
煤取乃れきいそ 孫の教ひりり

大のまを志くも情を
解結るもものありあ事
きり細匠の家をつげ
孫よりりまれり
きいぬ

昔々をきく大のまもや煤拂

餅ほきや丸美賣れ筒の餅

無任法阿の秋風よ山まきり
みしぬを思ひありそ

何れく行雲のいそきそ 集の着

大事の向ひる古老の
指揮をうきりそ
とちうくちるるわ

年暮のほりあむれあり 平の巻

年の暮火を何れと叫ぶ

山立を野山

あひつと契仲阿富梨

たまきききききき

野を待て春待新や鳥は籠

てをををををを

名残のをささか

りきききききき

歳とて嬉し春を待り

春の待や波ふ打家 磯の貝
下やうに春待を此山家

いなる人ありは情をわ

る年ふ形し情の互ふお通事

梅の命を身そ口か破るる

あもーた其情の筆を

悪小かーめさるああやま

けり

掛えやなまきききき

行幸也司母も立了水明り
大晦日の夜の時さう心なうらさ

雪水軒

泰静



柳花春の嵐山の気
古の松はしの結了
空の只あたふた
かゝるの事大井
屋敷ととそ
清純に流るる
水照を観るに
風雅に

変化神々の流り
とふか久れ如
井上就茶翁
流りに流るる
風魂を
向かひの吹井の如く

為るる
流るる
久に流るる
流るる
流るる
流るる
流るる
流るる

弘化丙午三月終日

一可希龍逸淵



半仙家書





